夢追い人列伝
その十四「小松徹伝」

初めに

近年の高校バスケット界では、全国から有望な選手を集めた強豪校がしのぎを削っており、山口県の高校はなかなか結果を残せていない。しかし、かつては県内の選手を中心に健闘を見せた女子チームも存在した。その中でも特に際立った実績を残しているのが、誠英高校（旧・三田尻女子）である。「夢追い人列伝」第14回では、この強豪チームを一代で築き上げた小松徹氏の足跡をたどる。

なお、文中ではインターハイ（全国高校総体）を「IH」、ウィンターカップ（平成28年まで全国高校選抜優勝大会、平成29年から全国高校選手権）を「WC」と略記することをお断りしておく。

小松　徹（こまつ　とおる）
昭和24年２月生まれ・山口県防府市在住
元三田尻女子高校・誠英高校女子バスケットボール部監督
元誠英高等学校校長
一般社団法人山口県バスケットボール協会　顧問
（元副会長、元・旧県協会理事長）

1　きっかけ

防府市生まれの小松氏は、華陽中時代は剣道部で鳴らしたが、防府高校では身長を伸ばしたくてバスケット部に入部した。ところが他の部員の喫煙が発覚し、チームは解散。その後は他の部に入ることもないまま卒業。東京経済大学に進学し、東京で就職した。

数年後に帰郷し、ボウリング場勤務を経て、縁あって三田尻女子高の商業科教員となった。26歳のときのことである。その際、バスケット部の副顧問を命じられた。約10年ぶりのバスケットとの再会だったが、小松氏にバスケットへの強い思いがあったわけではなく、単に空席だったポジションに新任教員が割り当てられただけの話であった。

昭和32年創部の三田尻バスケット部は、中国大会に出場したこともあるが、小松氏着任時は部員集めにも苦労する弱小チームだった。小松氏は、部員と共に体を動かしながらチームのレベルアップに励む一方で、審判にも取り組んだ。「やらされた」というべきか。

こんなことがあった。小松氏が審判を始めてまだ日が浅い頃、ある大会で、名の知れた監督から判定に対する激しい抗議を受けたのだが、その内容が理解できなかった。次の試合、今度はその監督が三田尻のゲームを吹いた。「相手に触れてもいないのにファウルを吹かれた」と選手が泣きながらベンチに戻ってくる。報復だった。「いい加減な笛を吹いていたら選手たちに迷惑がかかる」と痛感し、審判技術の向上を決意した。

山田隆道審判長の指導のもとに腕を磨き、日本公認（現在のB級）の資格を取得した。中国大会へ派遣されるようになり、昭和59年秋田インターハイの審判研修にも参加した。審判長が小池氏に替わると、広田修造氏、有澤弘行氏とともに、県全体の審判の育成にも尽力した。ただ、審判で更に上級を目指す気持ちはなく、それよりチーム強化に力を注いだ。

2　中国デビュー・全国デビュー

三田尻女子・誠英(女子)の全国大会出場記録（H1～H23）

年	IH	WC	年	IH	WC
1989(H1)	1回戦	1回戦	2001(H13)	2回戦	**3回戦**
1990(H2)	----	----	2002(H14)	2回戦	1回戦
1991(H3)	----	1回戦	2003(H15)	2回戦	**3回戦**
1992(H4)	**5位**	2回戦	2004(H16)	**3回戦**	2回戦
1993(H5)	----	**準優勝**	2005(H17)	----	----
1994(H6)	**3回戦**	2回戦	2006(H18)	**3回戦**	2回戦
1995(H7)	2回戦	**3回戦**	2007(H19)	1回戦	1回戦
1996(H8)	----	**3回戦**	2008(H20)	----	2回戦
1997(H9)	----	**5位**	2009(H21)	----	----
1998(H10)	1回戦	2回戦	2010(H22)	1回戦	1回戦
1999(H11)	1回戦	**4位**	2011(H23)	----	**3回戦**
2000(H12)	**3位**	**3回戦**			

IH：インターハイ　WC：ウィンターカップ

昭和59年、小松氏は正顧問となり、本格的な指導が始まった。引き継いだ時の部員は6人で市内最弱。「これは恥ずかしい、何とかしたい」と奮起し、高水高校や長府高校の門を叩いた。どちらも、10対130ほどで負ける相手だったが、必至に食らいついた。長府高校で市立戸畑商業（現・北九州市立高校）の門司氏との出会いがあった。「あそこまで生徒を追い込まなければ強くなれないのか」と衝撃を受けた。

同じ市内の吉村旦氏から「強くなるには、核になる選手を引っ張ってこなきゃだめ」との助言をもらい、勧誘に動いた。しかしどこへ行っても実績もない無名の高校の監督は取り合ってもらえず、悔しさと情けなさを噛み締めた。この経験が小松氏の闘志に火をつけた。「絶対に強くして、三田尻女子の名を全国に知らしめてやる」と心に誓った。

やがて、核になる選手が少しずつ入部し、チームは形を成してきた。戸畑商業のように厳しく鍛えれば県1位になれると信じ、長府を倒すことを目標にした。

監督2年目の冬、選抜大会中国予選（現在の中国新人大会の前身）に県3位で出場して中国デビュー。監督6年目の平成元年にはついにIHとWCへの初出場を果たした。さらに、山口県総合選手権でも初優勝を飾った。

昨年逝去された吉村旦氏は、ずっと三田尻・誠英の「応援団長」だった。遠方の部員を自宅に下宿させたこともある。試合会場に足を運べなくなってからも、ネットで伝えられる試合結果を心待ちにしていた。

3　WC準優勝

第24回全国高校選抜優勝大会（於 東京体育館）小松氏提供

三田尻の戦績で特筆すべきは、平成5年のWC準優勝である。

その予兆は前年の宮崎IHからあった。キャプテン西本を中心に岡本や鳳山といった強力な布陣を擁し、準々決勝まで勝ち上がった、第１シードの中村学園（福岡）には屈したものの山口県高校女子として初の第5位（ベスト8）に入る快挙を成し遂げた。

平成5年、岡本が抜け、大久保と阿部が加わった。県総体では光に敗れたが、WC予選で雪辱を果たし、4度目のWC出場を決めた。初戦（2回戦）で佐賀静和を降し、3回戦で再び中村学園と対戦。三田尻は前半を5点リードで折り返したが、後半に逆転され逆に5点差をつけられた。しかし、小松氏の「自分たちのバスケットを思い切ってやろ

う」の声に選手たちは奮起。再逆転し、最終的に61-55で勝利を収めた。続く準々決勝で倉敷翠松（岡山）を破り、準決勝で強豪・聖和学園（宮城）と対戦。後半、一時は16点のビハインドを背負うも、鳳山、山根、大谷、阿部、大久保のスタメン5人に加え、ベンチスタートの栗崎が躍動し、57-55の大逆転勝利を果たした。まさに会心のゲームだった。決勝の相手は、名古屋短大附属（現・桜花学園）。小松氏は、「結果はどうでもよいから、高校生らしいバスケットを思い切ってやってこい」と選手を送り出した。結果は35-65。力を出し切った戦いだった。

大会前、小松氏は中村学園に勝てるわけがないと思っていた。ところが、トントン拍子で決勝まで駆け上がった。正直、こんなことがあってよいのかと思った。まさに「無欲の勝利」であった。

東京からの帰りは夜行で、防府には大晦日の朝8時に到着。学校に戻ると、大勢の出迎えが待っていた。年が明け、盛大な祝賀会が催された。

第24回全国高校選抜優勝大会準優勝祝賀会（於 防府市内ホテル）小松氏提供

平成11年WCと平成12年IHで連続してベスト4に入り、三田尻は再び全国強豪校として脚光を浴びた。平成11年WCの主力は、松下、梅本、廣田、長藤、白神。松下以外は2年生であった。平成12年IHでは松下が抜け、畑が加わった。対戦相手は、甲子園（兵庫）、中村学園（福岡）、樟蔭東（大阪）、桜花学園（愛知）と全国の常連校ばかりであった。準決勝の桜花戦では、前半は27対33と食らいつき、後半に2点差まで詰め寄ったが、そこから桜花の猛攻を受けた。副顧問の田辺氏は報告書に「まるで手がつけられなかった。分かっていても止められなかった」と記している。最終スコアは51-78だった。

三田尻・誠英は、10名以上のトップリーグ・プレーヤーを輩出している。小松氏は最も印象に残っている選手として、日立戸塚・デンソー・日立ハイテクで活躍した大久保選手を上げた。センス、視野、判断力、冷静さのすべてに優れ、人間性も申し分なかった。旧姓・大久保の尾崎悠子氏は、小松氏への感謝を次のように語っている。

> **現役時代、取材で得意なプレーを聞かれた際に「視野の広さ」と答えた事があります。それは先生から学び、今も大切にしている事です。沢山の人に出会い、経験を積み、小松イズムの中で培った人間力で今の私があります。小松先生は、時には厳しく、愛情を持って育ててくれた尊敬する人生の恩師です。**

4　栄光の軌跡

次ページの記録を見ると、慶進（旧・宇部学園・宇部女子）の実績も三田尻・誠英に引けを取らない。ただし、これは昭和の上野監督・花田監督の時代と平成の村谷監督の時代の記録の合算であり、その間には20年以上のブランクがある。一方、三田尻・誠英の記録は、すべて小松監督時代のものである。

ライバルの存在は常にあった。平成9年までは、光と高水。平成10年からは宇部女子（現・慶進）。平成15年からはそこに徳山商業（現・徳山商工）も加わった。ライバル校との激戦は、数え切れない。

平成17年の県高校総体、誠英は準決勝で慶進に敗れた。誠英が県決勝に進めなかったのは、昭和63年以来、17年ぶりのことだった。慶進は決勝で徳山商を破り、22年ぶりのIH出場を決めた。小松・誠英の時代から村谷・慶進の時代へと移り変わる転換点が垣間見えた瞬間であった。村谷勉氏（現・早鞆高校）は当時を振り返り、次のように語る。

山口県高校女子の全国大会出場校（昭和23年～令和6年）

全国高校総体

回数	校名	成績（3回戦以上）
18（※1）	宇部学園・宇部女子・慶進	5位2回 3回戦2回
14	三田尻女子・誠英	3位1回　5位1回 3回戦2回
9	長府	
8	徳山商工	3回戦1回
6	光	3回戦2回
5	熊毛南	
4	防府商	
2	山口女子・山口　大津　早鞆　岩国	
1	下関南　香川　柳井商　高水　下松	

（※1）S35～S58に11回、H17～H27に7回

ウィンターカップ

回数	校名	成績（3回戦以上）
20	三田尻女子・誠英	2位1回　4位1回 5位1回　3回戦6回
16（※2）	宇部女子・慶進	3回戦2回
7	長府	
5	徳山商工	3回戦1回
1	高川　高水　光	

（※2）S46～S54に5回、H21～R5に10回

全国で勝てる指導者になりたくて教員になった私にとって、小松先生は目標であると同時に、越えなければならない壁でもありました。平成10年から全国大会の県予選決勝に10回以上進出しましたが、そのたびに跳ね返されました。平成17年についに誠英を倒して念願の全国大会の切符を手にしたときは、「やり尽くした。もうこれ以上、選手を鍛えることはできない」という思いで大会に臨んだことを今でも思い出します。その後も、小松先生とは県大会や中国大会で何度も死闘を繰り広げてきました。その経験こそが、私の指導の原動力であり、最高の財産となっています。

誠英と慶進の戦いが続く中、平成23年WCが小松・誠英の最後の全国大会となった。田辺氏は学校の事情ですでにチームを離れており、渡邉文紀氏が監督を引き継いだ。小松氏はチームのサポート役に回った。

5　男子部と新体育館

平成15年、三田尻女子高校は誠英高校と校名を変更し、男女共学となった。それと同時に男子バスケット部が誕生した。小松氏は男子部の面倒も見たが、狭い体育館を全国屈指の強豪・女子バレー部と共用する状況は変わらず、男子部が増えたことで練習環境は一層厳しくなった。おまけに入ってくるのは「バスケのお山の大将」ばかりである。バスケットはしたいが練習は嫌いで生活態度もよくない。デビュー戦となった県総体では、1回戦で下松にダブルスコアで敗れた。一方、同年の女子は、IH、WCに加えて、中国総合選手権を制して皇后杯に出場。女子日本リーグの甲府（現・山梨クィーンビーズ）と対戦している。

平成16年に、防府高校OBの西村悠氏が男子部の監督として着任したが、小松氏は引き続き男子部と西村監督を支え続けた。

平成17年、待望の新体育館が完成し、練習環境は劇的に改善された。新体育館の建設には防衛施設庁の補助があったが、当時小松氏は学校の事務局長の立場にあり、各方面との折衝に自ら奔走した。

やんちゃだった男子部も、徐々にチームらしくなり、力をつけていった。非常勤講師の弘中幸雄氏の手を借りたこともあった。平成19年には中国新人大会出場を果たし、平成22年の高校総体では決勝まで進出。しかし、下関工業に敗れ、その悔しさをバネにしたWC予選では見事に優勝し、男女そろってのWC出場を決めた。県内高校の男女同時の全国大会出場は、この時が唯一の記録である。

この時の男子部のキャプテンは、現在Bリーグなどの審判で活躍する柳田雅人氏であ

る。柳田氏は、当時を振り返り、次のように語っている。

> 私たちの代は、豊浦や山高を落ちてきた者が大半で、負けん気だけは人一倍強いヤンチャな選手ばかりでした。小松先生は、そんな私たちの自由なプレースタイルを尊重しつつ、生活態度や礼節については徹底的に指導してくださいました。IH予選の決勝で敗れた悔しさを胸に臨んだWC予選では、チームスローガンである「凡事徹底」を体現できたと感じています。先生として、監督として、時には「父親」として、温かくも厳しく指導してくださった小松先生に、全国の舞台で男女のベンチで指揮を執る機会を作れたことで、少しは恩返しができたのかなと思っています。

6　小松バスケットとは

IHで5位入賞した頃、小松氏は「実は少々天狗になっていた」と自嘲気味に振りかえる。ゾーンプレスで圧力をかけ、マイボールになると、たとえ3対2の場面でも3ポイントを狙わせる。それで勝てていた。そんなとき、広島で行われた招待大会で、瀬良強氏率いる新居浜商業のプレーに衝撃を受けた。外からのシュートに頼らず、パスランゲームを展開し、マンツーマンディフェンスを徹底する――「バスケットって、やっぱりこうだよな」と強く感じた。三田尻のバスケットに行き詰まりを感じていたときに、頭をポンと叩かれたような思いだった。すぐさま新居浜商業を訪れ、瀬良氏に教えを請うた。門司氏との出会いもそうだが、ちょっとした縁から始まった付き合いは今も続いている。

県協会設立に尽力した三戸雅之氏の功績を称えて8月に開催される三戸杯は、当初は県内限定の大会だった。しかし、レベルアップを図るために県外チームも招くことになり、小松氏のネットワークを活かし、前出の2校をはじめ各地の強豪校が集結するようになった。大会前には学校で合宿も行われ、選手たちは互いに親交を深めながら切磋琢磨する。こうして三戸杯は素晴らしい大会へと成長を遂げ、三田尻・誠英のみならず県全体のレベルアップにも大いに貢献している。

小松氏は、新井春生氏（名古屋経済大）のもとで何度も合宿を行った。昭和から平成へと変わるその日も合宿中であり、その際に新井氏に揮毫してもらった「平成元年合同合宿」いう書を今も自宅に掲げている。また、榎本日出夫氏（日立戸塚）からも多くを学び、譲り受けた膨大な資料を大切に保管している。今も誠英の試合をビデオで見返しては、榎本氏の資料をもとに「攻め方はこうした方がよかったのではないか」「守り方は・・・」と考察することが常である。

こうして、小松氏のバスケットは、さまざまな指導者のエッセンスを取り入れ、研究と経験を重ねることで形成されていった。小松氏は語る。

「勝ちたいから選手を集めて徹底的に鍛えたい。しかし、やはりベースとなるのは人間性。目配り・気配り・心配りができて、礼儀正しく素直な人間を育てることが大切。そこが育たなければ、本当の強さは生まれない」

小松イズムは、男女バスケット部の部旗に記される言葉に集約される。男子の方にはお名前の一文字も含まれており、味わい深い。

山口県のバスケットの未来について、氏は次のように語る。

「留学生を擁し全国から選手を集める強豪校があちこちにできた。山口県の強みは堅い守りだが、それだけでは勝てない。得点力のある核となる選手が必要だ。アンダーカテゴ

リーの指導者や保護者も巻き込んで、有望選手を県外に流出させない全県的な取組みが必要だ。そのためにも、プロチームとも連携して、山口県のバスケット人気を更に高めて欲しい」

7　国体少年女子

小松氏と国体との関わりについても記しておこう。小松氏が国体チームに携わったのは、初めて中国大会に出場した昭和61年からである。長府の佐賀氏と高水の田丸氏が監督を務めた時代に、2人の監督を支える役割を担った。平成3年から平成7年まで監督を務め、平成6年の愛知国体では3位入賞を果たした。このときの主力はWC準優勝のメンバーだった。

平成8年の広島国体で山口県の少年女子は準優勝を果たした。監督は慶進の村谷氏に引き継がれており、三田尻からは田辺元久氏がスタッフとして参加していた。小松氏は県協会役員として見届けた。

その後、監督は村谷氏から今田氏（徳山商）へと引き継がれたが、その合間の平成13年宮城国体で一時的に小松監督が復帰し、5位入賞を果たした。そして、平成23年の山口国体で二度目の復帰。前年から榎本氏の全面的な支援を受け、地元の期待に応えるべく強化を進めた。国体では、他の種別が初戦で敗れる中、3回戦まで進出。しかし目標としていた入賞には届かなかった。

2011山口国体 少年女子 山口vs大阪

8　県協会理事長

三田尻全盛期の平成9年に、小松氏は山口県バスケットボール協会理事長に就任した。前任の中村幸男氏からは大きな宿題が残されていた。長年の懸案であった協会史の発行である。小松氏は、必要な経費を確保するため、各チームの登録料に負担金を上乗せする形を採用。平成15年には、松本正氏を委員長に迎え、自らは副委員長として編纂委員会を発足させた。また、弘中幸雄氏を中心に編集委員会が編成され、柳井商業高校のセミナーハウスで行われた編集会議は、のべ30回に及んだ。こうして、県協会60年史『夢を追う』が完成し、平成19年2月に刊行された。

理事長3年目には、中国ブロックの代表理事も務めた。他の4県の理事長は協力的で、小松氏は中国代表として日本協会の会議に参加。その場で多くの人と知り合う機会を得られたことを「非常に有意義だった」と振り返る。

小松氏は平成19年まで県協会の理事長を務めた。その間、事務局長として小松氏を支えた澄川雅士氏は、当時を振り返り、次のように語る。

> 小松氏から「〇〇ちゃん」と声をかけられたときは、何かがある――知る人ぞ知る話です。「澄川ちゃん、話があるんだけど」と和食店に呼び出されたあの日から、10年にわたる二人三脚の旅が始まりました。県内にとどまらず、他の4県を巻き込みながら、中国ブロック全体のバスケットボールの発展を目指した。その中心にいたのが、小松理事長でした。氏の人柄と揺るぎない強い思いに共感し、信頼を寄せた多くの人々の力が、それを支えていました。

氏との活動の中で得た、多くの人との出会い、そして貴重な経験は、私にとって何ものにも代えがたい人生の宝です。「こまつちゃん、あの時声をかけてくれて、ありがとうございました。かけがえのない、楽しく充実した時間でした」

9　最後に

「先生にとってバスケットボールとは何ですか」と尋ねると「生きる原動力であり、生き甲斐です」と即座に答えが返ってきた。嬉しいこともあれば、悔しいこともあった。こんなにバスケットボールを好きになるとは思わなかったが、いつの間にか人生の中心となっていた。バスケットを通じて多くの人と出会い、さまざまな思いを知ることができた。それが自分にとって大きな財産になった。「自分の中の99％はバスケットボールが占めています」

家族には心から感謝している。今風に言えば、“バスケット・ファースト”の生活で、家を空け、お金も沢山使ったが、妻は「お父さんにはバスケットボールしかないでしょ」と理解を示してくれた。二人の子どもも自然とバスケットボールを始め、長男の広道氏は、防府高校から広島大へ進学し、現在は広島で高校教員として女子チームの監督をしている。中国大会で親子対決したこともある。長女は東京の大学を卒業後、帰郷して同居している。小松氏ご夫妻は3人のお孫さんの世話に追われる日々を過ごされている。

小松氏は、一弱小チームを全国屈指の強豪へと導き、さらには山口県・中国ブロックのバスケットの発展にも大きく貢献された。その卓越した指導力と深い人間性は、多くの人々に影響を与え、今なおバスケットボール界の宝として輝き続けている。どうかこれからも、ご夫婦ともどもご自愛いただきながら、誠英高校と山口県のバスケットボールの発展を温かく見守っていただきたい。

［文責：顕彰事業委員会］